

原発と英語 — 現代文明への問い

2011.9+3=12.11

町田エスペラント会公開講演会

木村護郎クリストフ

構成

0. はじめに

1. 「3.11」と原発、「9.11」と英語
2. アメリカとの紐帯／依存のしるしとしての原発と英語
3. 文明の根底を支えるエネルギーと言語
4. 文明の問題としての原発と英語の類似点
5. では何ができるのか～脱原発依存と脱英語依存に向けて～

0. はじめに

今日は、「原発と英語—現代文明への問い」という、つながりが一見分からないタイトルにさせていただきました。今年の3月11日以降、原発関連の講演は日本中で、毎日のようにいろいろな観点から行われていますけれども、英語と関係づけた内容は、おそらくこれが唯一でしょう。今日の話が貴重であるかはともかく、稀少であることは確かだと思います。そしてきていただいたみなさんにとって、願わくばなんらかの意義があればと思います。

さて、今日は、12月11日ということで、月でいうとちょうど9.11と3.11を足した日ですね。この2つの日付におこった出来事を合わせて考えるのに適した日ではないかと思いました。これは単なる語呂合わせではなくて、意味のあることだと考えます。9.11と3.11はどちらも、現代世界を大きく揺るがした出来事です。しかし、この2つを合わせて考えるということはおそらくあまりなされていないような気がします。実際、一見関係ないように見えますよね。ところが、根本で実はつながっているのではないかというのが、今日考えてみたいことです。で、どうつながっているかと言いますと、ひとつには3.11の問題点と、9.11の問題点に似ている側面があるということ。もうひとつは、それに対する対処案、どうしたらいいかということも実は似ているのではないかということです。そしてそれはそれぞれ「3.11と原発」、「9.11と英語」という側面についてなのです。この二つの日付をとおして、原発と英語について考えてみたいと思います。

今日は、町田エスペラント会が主催ですので、エスペラントも、この文脈の中に位置付

けてみたいと思います。エスペラントのことは最後のほうに出てくるということで、あらかじめご理解ください。

1. 「3.11」と原発、「9.11」と英語

英語と原発をつなげて考えるてがかりとして、まずは「3.11と原発」、「9.11と英語」の関係をおさえてみたいと思います。3.11と原発がどう関係するかは言うまでもないことでしょう。つまり3.11の一つの大きな構成要素として原発事故があります。夏に少し陸前高田に行ったんですけども、そこはご存じのとおり、津波がほぼ完全に町を破壊したところで、市街地だったところを更地が広がっています。私が行ったときも、山際からでてきたカモシカがそこを横断していました。このような東北の震災や津波の被害や問題もきわめて大切なのですが、今日は原発の話に絞るということをご理解ください。福島原発は関東に住むわたしたちに電力を供給するために存在していたものなので、これはわたしたちに直接かかわる問題でもあります。

次に、9.11が一体なんで英語と関係するのかということですが、そもそも9.11というのはどういう事件でしたでしょうか。

来場者： ニューヨークの国際ビルに、ハイジャックした飛行機が突っ込んでしまったという。

そうですね。違う出来事を思い浮かべた方はいらっしゃいますか。いないですね。ところが実は、そのこと自体、実はかなり不思議なことなんです。なんで私たちは「9.11」と言ったときに今あげていただいた事件を思い浮かべるのか。これはあまりにも当たり前のように思ってますけども、実は不思議なことなんです。

2001年の9月11日、世界でおこっていたとんでもないことはアメリカでの出来事だけでしょうか。1つだけ例を出したいと思います。これはいわゆる9.11のあとに、どこからか忘れましたが、メールで私のところに回ってきたものです。一部だけ紹介します。

~~~~~

2001年9月11日には、35615人の子どもが飢餓で亡くなった（国連食糧農業機関による）。

場所：世界でもっとも貧しい国々

テレビ特集：0、記事：0、各国首脳の説明：0、危機対応の呼びかけ：0、連帯の声明：0、黙想のひとつとき：0、犠牲者追悼：0、特別会合：0、金融市場の反応：0、責任者の追及を目ざす動き：0、考えられる責任者：豊かな国々

~~~~~

「0」というのは誇張がありますと思いますが、ある意味で真実をついているのではないのでしょうか。アメリカでの事件の方が、突発的な予想外のことだという意味でニュース性がありますし、単純に死者の数を比べても全く意味がないんですけれども、当然、飢餓の問題は非常に大きな問題と考えられます。ニューヨークの映像は衝撃的でしたが、映像の衝撃性をのぞくと、日本の私たちがみてあふれる食べ物のなかで暮らしている同じ日に、同じ地球上で飢えて死ぬ人がたくさんいるということの方がむしろ衝撃的とさえいえるかもしれません。しかしそのことへのメディアの関心はアメリカでのいわゆる 9.11 の出来事への関心に遠く及ばないようにみえました。どちらも大きな問題だと思うのですけれども。そのうち片方だけが私たちの記憶に留められる状況になっているということです。

これはなぜでしょうか。いろいろな要因が考えられますが、アフリカをはじめ飢餓のある国で何が起きているのかということ伝えるネットワークが弱いということがやはり、1つの背景にあると思います。特定の地域で起こった出来事が広まっていく反面、他の地域で起きている問題はほとんど注目されないというのは、私たちの世界を見る目の現実としておさえておく必要があります。

さらに考えてみましょう。9.11 といっても、この日付で世界史を見るといろいろな出来事が起こってるわけです。ある程度歴史に残る例をみると、1922年9月11日にはギリシャで当時の国王が退位することになるクーデターが、1973年9月11日にはチリでアジェンデ大統領が殺害されるクーデターがあった日です。もっと近年では、1990年の9月11日というと、ブッシュ（父）大統領が、湾岸戦争を始めることを議会で宣言した日だそうです。ですから、ギリシャ、チリ、イラクやクウェートの歴史においては9.11は異なった出来事と結びついてきたわけです。1922年9月11日はイギリスによるパレスチナ委任統治が宣言された日でもあるそうです。今日まで続く中東紛争の直接の発端にもつながるこの日付は、9月11日にあの自爆テロが行われた理由としてあげられることもあります。

ところが、私たち日本人にとっては、9.11 というのは、ニューヨークに飛行機が突っ込んだ日だけです。

確かに、飛行機がビルに突っ込んだ事件は、ちょうど10年前ですからもっとも最近の出来事です。まずこの日を思い出すのは当然と思われるかもしれませんが、でも、9.11 がアメリカの出来事と結びつく理由はそれだけではないでしょう。

さきほどもニュースの流れにふれましたが、私たちがどうやって世界のことを知るかということを改めて考えてみましょう。今、私たちはいろんなニュースを読んだり見たりしますが、その際に得る情報はどうやって得ているかというと、多くの場合、いわゆる通信社が集めたものを得ています。通信社は、世界各地にありまして、日本の場合、共同通信もあります。しかし、世界的に見て、国際通信社というのはどこにあるかというと、事実上イギリスとアメリカとフランスにしかないんですね。国際通信社とはどういうものかというと、第三国についても情報を回すところです。共同通信は、国際的には、基本的

に日本向けに海外のものを流したり、日本のことを海外に流すということをしています。ところが国際通信社は、第三国についての情報を、また別の国に回すということをやっているわけですね。ということは、私たちが世界に関する情報を得るといえるときには、フランスもありませんが、とりわけ英語圏から情報は非常に得やすい環境にあるわけです。それと同時に英語圏以外の出来事についても、英語圏のメディアの視点から私たちは受け取ることが非常に多いわけです。また、「国際メディア」と言われるもので、例えば、大きい本屋に行くと、ニューズウィークやタイムなどの雑誌を売っていますけれども、国際メディアといって世界中で売られている雑誌の多くは英語圏のもので、つまり私たちが国際的な視野を得ようとして得る情報は、英語圏から得ていることが多いということになるわけです。

最近、自分の職場であった例をご紹介します。日本を代表する経済団体がドイツのジャーナリストに対して研修をしたんです。日本のことを知ってもらいたいという研修を行いました。そのときにドイツのジャーナリストの人たちが私の勤めている大学にも来て、議論する機会がありました。そのときにその団体の事務局の方に聞いたところ、研修のお金は誰が出していると思いますか。— ドイツなんですね。つまりドイツの人たちが、自前で来るわけです。

今度はイギリスからジャーナリストが来ます。同じようにイギリスの各新聞社やニュースの担当者が来るんですけども、この場合、お金は誰が出していると思われませんか。この場合は、お金は、実は日本側が出しているということでした。この違いは何なんだということなんですけど、要するに言語の違いなんですね。ドイツ語で書かれたって、ドイツ人をはじめドイツ語分かる人にしか伝わらない。それに対して英語で書かれると世界中が読む。ということで、英語圏に対してどういう情報を流すかということが結構重要になってくるわけですね。その際、英語圏の記者は、英語圏の記者としての目でその情報を受けとめて書くわけです。そうすると、世界の人たちが日本のことを知るときには、彼らの目線を通して知ることが少なくないと考えられます。お金をどこから出すかということは、あまり本質的な問題でないかもしれませんが、そういうところに1つの構造的な違いというものが見えてくると思います。

しばらく前、ニューヨークタイムズという新聞が、「アメリカ経由で世界を見る」という広告をだしたことがあって、確かにその通りだなと思いました、正直でいいなと思いましたけれども（笑）。確かに1つの見方として重要だと思います。でも、それが「国際的な」見方になってしまっているというところに問題があるのではないのでしょうか。

ここまでいくつか例をあげてきましたが、要するに、2001年9月11日という同じ年の同じ日、また違う年の同じ日にはほかの地域でもほかの事件が起きているなかでアメリカの9.11だけが注目されるのはなぜかというのがここで考えたかった問題です。その理由の一端には、現代世界におけるアメリカの突出した存在感があると考えられます。

さらに別の角度から考えてみましょう。9.11という日付を離れてみると、ほかの日にも虐殺やテロはあちこちで行われていますが、なぜ9.11だけが格段にとりあげられるのかと

いうことにも疑問がわいてきます。

アラブ研究者の岡真理さんが、2001年のアメリカの9.11のあと、「私たちは何者の視点で世界を見るのか」という印象的な文章を書いています。

「二〇〇一年九月一日、ニューヨークの世界貿易センタービルが攻撃を受け、崩壊し、一瞬にして数千人の命が奪われたとき、あるメディアはこの出来事を、人間の歴史に長く記憶されるであろう悲劇として報じた。アメリカの歴史、ではない。人間の歴史、である。(…)日々、世界に流される、犠牲者の死をめぐる具体的かつ詳細な報道によって、たしかに、数千人の命を一瞬にして見舞った死という出来事が、世界の人々に共感を呼ぶ出来事として共有されたと言えるだろう。」

しかし一方で、パレスチナ難民キャンプで起こった度重なる虐殺については、「それらの出来事は決して、人間の歴史に長く記憶される悲劇として認識されてはいない。(…)まさにそれゆえに、つまり、出来事があくまでも「彼らの」出来事であって、「私たちの」出来事として記憶されないがゆえに、パレスチナ人はその後も、虐殺され続けているのではないだろうか。」(現代思想 2001年10月臨時増刊号)

この指摘は、アメリカでのテロ事件の背景にもつながってきます。つまり世界におけるこのような非対称性こそが、2001.9.11のテロの背景にあるという指摘があるのです。英語学者の森住衛(もりずみまもる)さんの文章を引用します。

「私が思うに、あの事件[9.11]の遠因は、というより、根本的な原因は、権力やイデオロギー、あるいは政治力が一極集中したことに対する反発にあります。Globalization(グローバル化)がAmericanization(アメリカ化)になってしまったことに対するイスラム圏の反発です。もちろん、あのような無謀な行動を擁護する気は毛頭ありませんが、なぜあのようなになったかの原因を考えると、文化や思想、政治の一極集中にあるのです。」(森住衛 2004: 26)

つまり、9・11という事件が起こった背景はいろいろ考えられますけれども、根本的なところに何があるかと言うと、そこにアメリカへの一極集中に対する反発があったのではないかということです。そこで英語はどう関係するかというのが次の問題です。

上にあげた森住さんの指摘は、情報の格差の1つの現れとして、あのニューヨークで起こった9.11の事件を考えることができるのではないかという問題提起だと思います。つまり、普通は、何か問題があると私たちどうするかと言うと、とりあえず文句を言いますよね。例えば、この部屋が暑かったら、今日の主催者や公民館の人に言うことができるわけですね。ところが、伝える手段がないときにどうするかと言うと、実力行使に出るわけで

す。自分で窓を開けるとか何かするわけです。で、9.11 というのは、完全にコミュニケーションが切れた状況で実力行使をしたということだろうと思います。

つまり、コミュニケーションが一種、完全に切れている、できない状況の中で、ああいう無茶苦茶な行動を取ったということは、ある意味ではコミュニケーションの問題と考えることもできると思います。

このことを私が肌身で感じたのは、うちの子どものことが3歳くらいのときの出来事でした。私と妻が話をしてました。そうすると、子どもが、「ねえ、ねえ、ちょっといい」とか言うてくるんですけども、「ちょっとまって、あとでね」とかって言って、ずっと話し続けてたんです。そうすると、子どもは突然、そこにおいてあった私の本をビリッと破ったんです。小さいとはいえ、そんなこと絶対悪いって分かっているし、やっちゃいけないと分かっているし、普段はそんなこと絶対しないんだけども、いつまで経っても相手にされないの、子どもはそうしたら注目されるに違いないと、そういうことをやったのでしょ。そのときにちょっとテロリストの気持ちが分かった気がしました。テロは全く正当化できないことですし、もちろん、そのときも子どもに対しては怒りましたけれども、同時に自分の態度もよくなかったと反省しました。自分が相手にされない、尊重されないという絶望的な状況の中でああいうテロが起こるということ、やはり、認識する必要がありますし、そのことは、今の私たちが情報を得る流れとか、どういう内容が世界に伝わるかということとも無関係ではないというふうに思います。

情報が英語をとおして流れるということは、英語圏からの情報が流れやすいということでもありますし、それ以外の地域についても英語圏の見方をとおしてみることにしやすということでもあります。湾岸戦争や、「9.11」への反応としておこされたいわゆるイラク戦争で、しきりに上からの、いわば落とす側の視点である「空爆」という表現が使われていたことは、象徴的でした。まさにこのような状況にみられるコミュニケーションの格差が、テロの背景にあると考えてもおかしくありません。その意味で、9.11 は英語と関連してくるのです。

2. アメリカとの紐帯／依存のしるしとしての原発と英語

ここまでは、3.11 と原発はいうまでもないとしても、9.11 と英語がどう関係するかということ、今度は、英語と原発がどう関係するかということを考えてみたいとおもいます。この二つが関係するかも、と思ったのは、ある本を見てからです。これは、本多勝一という人の最近の本で、タイトルを見てびっくりしました。『英語』という“差別” 「原発」という“犯罪”』という非常に過激なタイトルです。その副題に何と書いてあったかと言いますと、「米国に心も命も収奪された日本人」。つまり本多さんは、英語も原発もアメリカ依存との関係で見ているのかなと思いました。実際読んでみると、英語の問題が書いてあって、原発問題が書いてあるんだけども、両者の関係性は残念ながら全然書いてあり

ませんでした。しかしおそらく著者の念頭にあったのは、この2つがアメリカと関係する、アメリカとの関係と関係するということであろうと思います。で、そう言われると、ある意味当たってるなと思うわけです。つまり、日本は戦後どうやって発展してきたかを国際政治学者に言わせると「核の傘とドルの傘のもとで発展してきた」と言えるそうです。アメリカの核兵器のもとで安全を保障されてきた。そして「日米貿易」をしてきたことによって、日本は戦後大きな復興を遂げて経済発展したという側面があるということです。そう考えると、これらに付随するものとして、原発と英語があったのではないかということですね。

つまりいずれも明らかにアメリカとの関係の中で日本に導入・普及されていったということです。英語のほうは言うまでもないですが、原発もほとんどすべてアメリカ型が導入されて今日に至っています。日本への原発導入に際しては、被爆国としての日本の核アレルギーを取り除くという思惑もあったようです。戦後日本はこのような形で、アメリカとくんで、まあ、うまくやってきたわけですね。核の傘とドルの傘のもとで今日のように発展してきたわけですね。しかしそこで隠されていた問題点が噴出したのが3・11であり9・11であったと考えられないでしょうか。つまり、3・11のほうは元々、核兵器という、敵をやっつけるためにつくったものを、何とかそのエネルギーをなだめて発電に使おうという発想で持ってきたんだけど、なだめきれなかったというところがある。で、英語のほうはどうかと言うと、9・11でコミュニケーションが切れた状態があかすみにでたというのは、日本のように英語一辺倒の教育をして、アメリカのほうを向いて、アメリカを通して世界を見ている国にとっても他人事ではないと思います。

これまで私たちは、原発と英語の恩恵を受けて「発展」してきたわけで、決して簡単に否定しざるべきものではないのですが、これからもこのままでいいのかということをも3・11と9・11は考えるきっかけを与えてくれているように思います。

3. 文明の根底を支えるエネルギーと言語

そこで考えたのは、これは決して日米関係だけの問題ではなくて、むしろ現代文明の根本に係わる問題ではないのだろうかということです。アメリカとの関係については、ここであまり突っ込むつもりはなくて、むしろそこから先のところを今日は主に考えてみたいと思っています。

そこでちょっと考えてみますと、文明は何で動いているかと言うと、エネルギーが必要なのですね。そのなかで電力もあります。今停電してしまったら、いきなり暗くなりますし、ここは8階ですから、ここまで上がってくるのも大変だったんだろうと思います。私たちの文明は電力を含むエネルギーで支えられているという面が非常に強いと思います。そして電力を供給する技術のいわば頂点として原子力があったと思います。つまり、原子力は、科学技術の一種、頂点としての意味を持ってきたのではないかと思います。そうい

う意味で、現代科学技術文明の精髓ではないかと。

では、言語のほうはどうかと言うと、言語は文化でだけではないわけですね。つまり、言語というものは、文明の問題でもある。つまり、これは、梅棹忠夫（うめさただお）という、今年亡くなられた文化人類学者の方がおっしゃっていたことです。梅棹さんは次のように述べています。

「現代文明の根底をささえているものは、いまや物質的生産から情報へとしだいに推移しつつある。（…）文明の基礎条件となってくるのは情報である。（…）とくに情報ソフトのおおきな部分は言語情報でしめられている。」（梅棹 2004: 3-4）

日本社会は日本語を取ってしまったら、うまく機能しませんよね。日本の場合は、日本語というものがかなり隅々まで使われるということが1つの大きな特徴になっていて、そのことが近代国家としての発展に大きな影響を与えました。

で、世界的に見ると、現代文明の様々な要所をつなぐ鍵として、国際的な英語の使用があると思います。現在は、世界で英語がある程度通じる人は大体人口の2～3割ぐらいと言われています。少ないと思われるかもしれませんが、人類の歴史の中で2、3割もの人がお互いにコミュニケーションが取れる言語を持ったということは、前代未聞の出来事で、そういう意味では、英語は、人類のこれまでにない到達点を表しているわけで、これは、やはりすごいことです。すべての人に通じることは到底無理ですが、どこの国に行っても英語によって通じる人がいるというのはすごいことだと思います。

このように英語と原発はどちらも、現代文明を担う上で人類がこれまでつくってきた1つの到達点として、現代文明の精髓でもあると思います。私自身、原発と英語の恩恵を受けてきました。しかし先ほど申し上げたように9.11と3.11は、私たちが自明のものとしてとらえている現代文明を支える役割を果たしている英語や電力の問題について考え直すきっかけを与えてくれていると思いますので、この機会に少し掘りさげてみたいと思います。

4. 文明の問題としての原発と英語の類似点

① （自己）植民地化（「セルフ・オリエンタリズム」）による拡大（過去および現在）

9・11と3・11はどちらも文明を支える言語やエネルギーの問題に係わっているということをおもったときに、そこであらわれた問題にもいくつか類似する構造があるということをおもいました。

まず1つめに、どちらも「植民地」という表現で問題点が指摘されています。

まず原子力についてみてみましょう。坂本龍一が、原発と植民地主義について次のように書いていました。

「危険な原発や放射性廃棄物を貧しい地方に押し付けているのですが、それはヨーロッパの列強がかつて植民地を作って搾取してきたのと、基本的には同じやり方だと思います。その地域の生活基盤を奪っておいて、原発を持ってくる。そうすると、そこで生活している人たちは生きていけませんから、原発を受け入れるしかない。(…) かつての植民地主義と基本的には同じ構造だと思います。」(坂本 2011:37)

原子力は、一見とてもうまい構造に見えます。立地地域にとってはたくさんお金が入って、電気を使う大都市圏のほうは、そのことで電力を得るということで、一種、ウインウインゲームのように両方とも得をするように見えます。ところが、3.11 で明らかになったように、リスクを負うのは福島などの立地地域の人です。何か起こったら、向こうの人がリスクを負うということになるわけで、これは不均衡の構造です。利益は両方得るように見えつつ、実は、リスクは片方だけが負うという、片務的な義務のもとで、行われているものであるのです。

一方、英語がどうやって広まったかと言うと、これは、元々は大英帝国が世界中に植民地を持ったことですね。つまり、まさに植民地化によって広まったわけです。英語は、明らかに軍事力と政治力、そして経済力で広まっていったわけです。これは過去の話ではなく、現在もそういう側面を持っていて、本多勝一という先ほどの過激な題の本のなかには「英語に叩頭して植民地化を進める日本人」という文章が載っています。どういう意味で植民地かと言うと、あたかも英語圏の植民地かのごとく、自ら英語化を進めているというのです。私たちが英語を学んで使うことで利益を得るわけですから何が問題なのか、という疑問もあるでしょう。けれども、たとえばアメリカ人とコミュニケーションが成立しなかった場合にどっちが責任取るかと言うと、アメリカ人は責任を取りません、私たち日本人がもっと英語勉強しなきゃと思うわけですね。つまり両方とも利益を得るようだけでも、実はリスクを背負うのは片方なわけです。

② 「必要」とされ、マイナス面に目をつぶってきた。ほかの可能性を軽視してきた。

もう1つ共通点として思ったのが、どちらも必要だと言われてきたことですね。つまり、原発がないと、日本は海外からの石油やガスの輸入に依存しないとイケないし、エネルギーがきちんと供給できないということで、原発というのはずっと必要と言われてきました。確かにそういう側面は否めないと思います。しかし裏をかえすと、電力を得るほかの可能性は、それほど真剣に追及されてこなかったわけです。エネルギー関係の開発費は相当部分が原発に入っているようです。電気料金の明細を見ると、最近は太陽光発電促進費とか書いてありますが、原発促進費とは書いてありません。電源開発費のほとんどを原発促進費として使ってるんだけれども、そこは出てこなくて太陽光だけ出てくるってのは、ずるい書き方だと思います。いわゆる代替エネルギーが伸びなかった1つの理由は、原発にばかり投資してきたからと言われていています。他のエネルギー源では足りないから原発

に頼らざるを得ないと言うけども、なんで足りないかと言うと、原発ばかり研究してきたからということではないのかという疑問があります。だから、ほかの供給源が足りないから原発が必要なんじゃなくて、他のことをやってこなかったから原発が必要になってくるとみることもできます。

英語の場合も、必要だということで、他の可能性、つまり、英語以外の言語で国際的なコミュニケーションを取るということには、英語に比べるとほんのわずかしか投資されてこなかった、英語がないと国際的にコミュニケーションできないって言うんだけど、それは、みんな英語しか勉強してないから英語でしかできないに決まってるわけで、他の言語を勉強すれば、もっと他の地域に対してもコミュニケーションができるようになるというふうに考えられます。もっとも広く普及した言語として英語に重点をおくということは当然だと思うんですけども、それだけでいいのかという問題なわけですね。

③ 部分的合理性⇔全体的合理性

もう1つ、「部分的合理性と全体的合理性」ということをあげたいと思います。原発も英語も非常に経済的で効率的であると言われてきました。原発がどう経済的で効率的かと言うと、小さなウランで、すごいエネルギーが出るというわけです。石油だったらはるかに多くの量が必要だということです。なるほどすごいと思いますが、原発に係わる費用というものは、実は全部計算しないで、効率的だと言っているわけです。たとえば原発の廃棄物処理はどうなるかも決まっていないわけですから計算しようがないわけです。計算しようがないけど、明らかに負担を将来の世代にかける構造になっています。しかも事故が起こってしまうと、もっと大きな費用がかかるので、一体、原発が本当に効率的なのかというのはよく分からない、というかかなりあやしいわけなんです。

英語の場合はどうかと言いますと、英語も世界中の人とコミュニケーションができるという意味では非常に効率的です。でも、英語でできるコミュニケーションで一般的なのは「ファースト・コミュニケーション」(fast communication)ですね。ベーシック・シンプル・イングリッシュと言われるもので、最低限のコミュニケーションは取るけれども、そこには他の文化に対する理解とか他の文化をふまえて話すといったことはほとんど入っていません。もちろん、英語圏の文化はいつのまにか入っているけども、それ以外の地域については、あくまでも、ファースト・コミュニケーションをするということです。これはすごく便利な面が確かにあると同時に、それで分かったつもりになるということは、すごく危険なことです。「アメリカ＝国際社会」というような言説に出会うことはめずらしくありません。「世界では」というので、なにかとおもってみると、「アメリカでは」ということだったりします。アメリカやイギリスが、ほかの地域にまけずおとらず独特の非常に特殊な価値観を持った社会であるということを認識しないで、英米のような価値観で世界が動いていると思うと、世界の理解がゆがむというとはすでに上でみてきたとおりです。日本は

アメリカ、イギリスと親しいから英米のことを学ぶというのは非常に納得いくんですけども、それが世界だと言われると、ちょっと待ったというふうに思わざるを得ません。

④原動力としての「欲望の開放」

そして最後の点が、原発の推進も国際的な英語の使用の拡大も、「欲望の解放」と結びついているのではないかということです。これはとりわけ難しい、しかし避けては通れない根本的な問題だと思います。

原発については山折哲雄（やまおりてつお）さんという宗教学者がこのように言っています。

「いまその[核]再定義で問題になるのは、豊かさへの、利便性へのわれわれの「欲望」の問題ではないか。果てしない豊かさへの欲望を保証する電力。それを生む原子力発電に、賛成する、あるいは反対する、そのいずれの場合においても、今回の危機的な状況を機に、われわれの欲望の問題をどう考えるか。ここに行かないと根本的な議論にはなっていないような気がします。」（山折 2011:46）

どういう欲望かということを書いているわけではないんですけども、推測するに、私たち電力を使う側から考えると、やはり無限の便利さ、快適さの追求ですね。たとえばさっきこのトイレ行って、便座が暖かくて気持ち悪かったのでコンセント抜いてきましたけども（笑）、日本の私たちは便座は暖かいのが当たり前だと思ってしまうわけですね。この調子で無限の便利さをどんどん追及するというのが、どんどん電力消費を増やすことにつながっています。

で、電力を供給する側はどうかと言うと、つくる側はどんどん儲けをふやすことを考えます。これは市場経済において経済活動する者として当然のことです。儲けたいという欲望は今の社会において前提とされる欲望なので、それ自体別に悪いこととは思いません。でも、日本で原発事故への対処に困っている状況で、海外に原発輸出するというのはい体、どういう神経してるんだろうと思ってしまう。この前ベトナムに輸出するというのを決めたようですけども、1基4千億円だそうです。お金に目がくらんだとしてもふしぎではありません。

英語はどうでしょうか。英語が国際語とか地球語とか言われていますが、現在の英語の普及の大きな原動力となっているのは経済です。英語が通じるということは、要するに、金儲けにかかわるところで一番通じるわけですね。English is Money といわれますけれども、実際、経済活動に使うというのが、多くの人々が英語を学ぶ理由だろうと思います。もちろん、さまざまな国際交流に使うという目的もあるわけですが、言語が趣味でもなく、国際交流に関心もない人が英語を学ぶのはどうしてかと言うと、やはり、お金を稼

ぐために役立つと思うからだと思います。最近、英語を社内公用語にする企業が相次ぎましたが、それらの企業においては海外に向けた成長戦略として英語を位置づけています。

英語を供給する側、英語産業は、この流れにのっけようとして攻勢にでています。電車の車内広告で英会話学校の広告をみない日はありません。英語ができないで困っている場面を次々とみせる広告をみていると、英語が実際に必要だからというよりも、必要であるという気分を高めようとしているようにみえます。

このような動きは、確かに経済活動のグローバル化に対応する、ないしそれを先取りしようとするものでしょう。しかし先にとりあげたような英語一辺倒の弊害をより拡大する危険性をはらんでいるのも事実です。英語で見える世界だけが世界だと勘違いする人が増えることは、地球社会における日本の今後のかじとりにとって、致命的な欠陥になりかねません。その意味で経済成長の欲望に英語がからむことを手放しで歓迎する気持ちにはなれません。

このように、原発や英語の推進は、共通する強力な原動力にもとづいている面がありますが、そこにはそれぞれ問題点も存在します。さらに、共通する根本問題があると思います。それは、このような方向性で欲望を開放することで私たちは果たしてより幸せになるのだろうかということです。

ふたつの側面から考えてみましょう。まず1つめとして考えたいことは、先ほど見ましたように国際語としての英語は情報格差の上に成り立っているし、原発も地域格差や将来へのしわ寄せなど、犠牲の上に成り立った幸せであるというふうに言えると思います。だから、私たちは今日本でゆたかに生きていますけれども、他方では私たちの生活が他者の犠牲の上に成り立っているということも事実です。長有紀枝（おさゆきえ）さんという、「難民を助ける会」というところの理事長をやっている方が、「3・11から半年、9・11から10年」という文章を書いています。そこで、私たちが、原発の電力を享受してきたということが書いてあって、さらに次のように述べられています。

「誰かの犠牲の上に成り立つ生活は短期的には可能であっても長期的には存在し得ない。誰かの犠牲の上に築かれる幸福では誰も幸せになれない。業務調査のためにアフガニスタンから来日した「難民を助ける会」の職員と話しつつ、9・11の同時多発テロ事件から10年の節目に改めて、そうした思いを抱いています。」

ここで、長さんは図らずも、3.11と9.11がどちらも、格差や犠牲の上に成り立った幸せを問い直すことをうながしているということを感じました。

二つ目の点は、ある程度以上の経済的な豊かさは、もはや幸福感を上昇させないということです。経済的な豊かさと幸福感は、ある程度は比例するけれど、あるところまで行くと、もっと豊かになっても幸せは増えないということが指摘されています。むしろ反比例さえするというのです。日本で言うと、私たちは、これ以上物を持って、これ以上エネルギー

ギーを使って、もっと幸せになるのでしょうか。もっと便座を暖かくして、もっと、エレベーターを早くして、もっと便利快適にしていくことで、私たちは果たして本当に幸せになるのでしょうか。

これに関して、オーギュスタン・ベルクという人が面白いことを言っているのを読みました。「人間」というのは、どうやって書くかと言うと、「人」と「間」を足して人間ですね。ところが、ベルクは、人間は近代社会において片方を失っているんじゃないかということです。半分を失っている。「人」だけになってしまって「間」がないんじゃないかと。間というのは「関係」ですね。人と人の関係でもあるし、自然や風土との関係でもあるということを書いていました。人間っていうのは人間であって初めて満足を感じるんだけど、間がない存在だと何か足りない感じがする。その足りない感じを補うために物をどんどん増やそうとするという説なんです。失われた半分以上を物で補おうとするから際限なく消費を増やすんだけど、それでは永遠に人間は満たされない。つまり、物を増やしても人間になれないんですね。人物にはなれるかもしれないけども（笑）。最近、流行りの言葉で言うと「人材」（人財？）ですね。私のいる大学も、何とか人材を養成しようと言っていますが、人材じゃなくて人間を養成する大学にしたいなと思います。

このように考えていくと、これまでのやり方を続けていくことは持続可能でもなければ幸せの増進にも貢献しない可能性が高い。だったら一体何のためにやってんだろうかと思ってしまう。

5. では何ができるのか～脱原発依存と脱英語依存に向けて～

もしこれまで考えてきたように、ひたすら原発や英語を推進していくことが問題をはらむとすれば、—これは議論が分かれるところだと思いますので、あとから是非、皆さんの率直なご感想を、異論・反論を含めてお聞きしたいと思いますが— どのような対策がとりうるのかということの当然かんがえなければなりません。もちろんかたや電力、かたや言語ですからまったく別の分野ですし、原発のばあいはそれ自体が問題だという論もありますが、英語の場合は英語自体が問題ということだけでなく、もちろん、英語がほぼ唯一の国際語として使われることが問題なのですから、ちがうところもたくさんあります。にもかかわらず、原発と英語で問題点が似ている以上、対策も似たような発想がありうると仮定してもあながちまとはずれではないでしょう。「脱原発依存」ということが言われますが、同じように言ってみると「脱英語依存」ということも考えられるのではないかということ。具体的に見てみましょう。

① 分散型へ

まず、電力供給に関して、「分散型」をかんがえるべきだということが指摘されています。

3.11 以前の日本の政府の目標として、電力供給の半分を原発でまかなおうという案がありました。逆に、脱原発依存ということは、他のさまざまなエネルギーを増やしていこうということになります。例えば、太陽光が今、注目されています。しかし太陽光1つに頼ってしまうと、今度はちがった問題が出てくる。休耕田に太陽光パネルがかぶさっている農村風景は正直言ってあまりうれしくありません。これは生態学的に問題をひきおこすでしょう。風力もいろんな公害問題が出てきています。ですから、どれか1つに頼るということではなくて、分散していくべきだということが今、指摘されていると思います。

言語についても、英語力ばかりを高めるのではなく、多様な言語を提供していくことが課題です。言語についてアメリカが9・11のあと、どう対応を取ったかということが示唆的だと思います。それはどういうことかと言うと、言語教育に力を入れる政策を打ちだしたんですね。たとえば国家安全保障言語構想(National Security Language Initiative)というものがうちだされて、これは国の安全保障を考える上で言語をもっと学ぶ必要があるということです。

ご存じの方も多いと思いますけども、3つの言語ができる人は何ということかと言うと、「トリリンガル」。2つの言語ができる人のことを何ということかと言うと、「バイリンガル」。で、1つの言語しかできない人のことを何ということかと言うと、「アメリカ人」、っていう冗談がありますけれども、そういうアメリカの問題が9.11の背景にあるという反省から、アメリカでも、ここで言語が問題になっている側面があることに気づいているわけです。

ヨーロッパでは「言語分業社会」ということが提案されたことがあります。これは、みんなが英語だけを学ぶのではなく、いろんな人がいろんな言語を学んで、お互いに助け合うという社会です。ある言語が必要になったら、その言語ができる人が自分の能力を提供するということです。いろいろな言語能力を持った人がそれを生かし合っていく社会というものができると、世界の諸地域と交流が深まるということが考えられそうです。

② 過剰な使用を控える

2つ目が「過剰な使用を控える」ということです。電力については、なるべく本当に必要なところ以外では使わないということになります。みなさん必要不可欠だと思われるかもしれませんが、エアコンの例をあげたいと思います。私はこれまで30何年間、エアコンなしで生きてきました。名古屋生まれで大学生になってからは今日まで東京に住んでいます。人生の半分ぐらい名古屋で過ごして、半分は東京なんですけども、エアコンのある部屋に住んだことが今まで一度もありません。厳密に言えば、名古屋の実家にはありましたが、つけた記憶がありません。なぜエアコンをとりあげるかと言うと、この夏、電力不足で困るといえるときに、何が困ったかと言うと、電力会社の説明によれば、夏の日中に電力需要のピークがあるわけですね。で、このピークをつくってるのは何かと言うと、エアコンが大きいというのです。とすると、エアコンがいらなくなればも原発いらぬといっても

いいくらいです。そうであれば、エアコンの罪は大きいです。より大きくはエアコンがないと暑くて仕方がないような町や建築物をつくってしまったことが問題です。またエアコン中毒もみられます。例えば窓開けりゃあ済むばあいでもエアコン使うとか。私の大学の同僚にもいます。窓開けても気温は全く同じで、むしろ、風が通って気持ちいいぐらいとおもうんだけど、締め切ってエアコンつけてる。

私が住んでいる町田市も、とうとう、よりによって今年から、小学校にエアコンを増やしていく、全部の教室に入れるということを、愚かにも全会一致で議決して、どの会派も「うちの会派が実現した」と自慢してましたけども、エアコンなしで生きていけないような小学生をつくり出すということは、僕は、これは非常に大きな疑問を持っています。子供の将来を考えると、犯罪行為ではないかとさえ思います。

もちろん、エアコンの必要な病院や高齢者の住宅や施設はあると思うので、エアコン自体を否定するつもりはないんですけども、エアコンがないと生きていけない子どもをつくり出したりとか、エアコンを一年中つけておかないといけない環境をつくるというのは、これはどうかしてるんじゃないかと思わざるを得ません。

エアコンばかりやり玉にあげましたが、全体的にみなおすためには、アンペアダウンもおもしろいです。自分の家の契約する電気を減らすということです。我が家では、ひっこしてきたときから40アンペアになっていたのですが、30アンペアにしても全然こまりません。これは電力会社に申し込めばただでやってくれます。

言語の場合も、英語使用を減らすということで、はじめの方でも引用した梅棹さんが次のように述べています。

「今後、国際化がどんどん進んでゆきますが、国際化とは英語を使うことではない。むしろ英語を使わなくすることが国際化への道だと、わたしは考えています。英語を使えば使うほど、国際化から離れてゆくのです。」(梅棹 2004: 24)

つまり、国際化っていうのは、アメリカ化でなくて世界化だとすると、世界のいろんな地域に目を向けるということになる。その場合、英語を使っていくということで限界があるということに気づく必要があるというふうに私はこの提言を解釈しました。

このように分散化、過剰使用の抑制を行っていくことは、上で紹介したベルクのいう意味での「人間性」の回復にもつながると考えられます。先ほど、人間というのは「人+間」ということで、人間の半分である「間」を復元しないといけない、それは人間関係でもあり同時に、風土との関係を取り戻すことでもあるというベルクの論にふれました。

まず風土についてみてみましょう。私たちが生きている、この日本の気候、自然との関係を取り戻すことについて。自分の経験だけしか語れませんけれども、節電は、実は、この自然との関係を回復するのに非常に大きな意味を持っていると思います。我が家では夏は暑い、冬は寒いです。夏は汗をかき、冬は暖かく着て過ごしています。暖かいものを着るとストーブはかなりいらなくなります。私の仕事部屋や寝室には冷房はもちろん暖房も

ありません。妻が北海道出身で家のなかで寒いと耐えられないと言うので、台所・居間にはあるんですけども、ストーブの温度は 15℃にしています。そのことによって夏と冬の季節感を私たちは十分に味わっています。

森岡正博（もりおかさまひろ）さんという人が『無痛文明論』という本で、今の社会というのは、だんだん痛みをなくそうとする社会、文明だということを指摘していて、そのことによって私たちは、実は、失っているものが大きいということを指摘しています。その中からお読みします。

「既に所有しているものや与えられているものを私の前に全面開花させる可能性は、いついかなるときでも残存している。その可能性を全面開花させるための知が必要である。そのための知というものを私たち、我々はまだ持っていない。(…) そういった側面を我々の文明はなおざりにしてきた。無痛文明から脱出するためにはそういう知が必要である。つまり、既に所有しているものや与えられているものの可能性を開花させる知が十分に練り上げられたものを私は開花の学と呼ぶことにしたい。」

で、これは一体どういうものかと言うと、具体的に見ると、「所有物を減らす方向で生命の欲望を満たしていくことすら可能である」と書いています。つまり、節電と言うと、我慢を連想するかもしれませんが、欲望をただ抑制して我慢するだけでは、どっかで爆発してしまう。欲望が爆発するだけでは意味がないので、欲望を違うふうに満たすというように考えを変えていくということをここで言っていると思います。

また、引用を読みます。

「地球環境危機をくぐり抜けるためには所有や消費を縮小することがどうしても必要であると言われる。しかし、それは決して禁欲生活を送ることを意味しない。なぜならば、たとえ所有物やエネルギー消費が増加しなくても、高価な電化製品やクーラーがなくても、それなしで楽しく気持ちいい生活を送ることができるような人間と私自身を変容させていくチャンスなのだというふうに、前向きに捉えることができるからである。例えば一日中クーラーをかけて仕事をしていた人が、日に一日、1時間でもいいから窓を開け、外の空気を入れ、暑い気温の中で仕事をしたとしてみる。そのとき、その人は、自分が次第に暑さに慣れ、時折、吹いてくるそよ風を心地よいと思い、窓の外から聞えてくる生活音や鳥の鳴き声に新鮮な気分を感じていることに気づくだろう。部屋を閉め切ることによって我々は外部の音を聞く楽しみを奪われているのだ。そのことすら普段忘れていた。そして、クーラーがないと私は二度と生活は、仕事はできないなどと思い込んでいる。このように所有物やエネルギー消費を減らすことによって初めて目覚めてくる感受性というものがある。このような感受性で全身を満たしながら日々を生き生きと過ごしていけるような私になりたいという形の生命の欲望があり得るのだ。手に入れてしまった快適さは二度と手放せないという俗説も無痛文明が仕掛けてくる罠である。」

このような精神面とは別に、純粋に経済的に考えても、節電をすると、かなりお金が浮きます。我が家の場合、家族4人で1ヶ月の電力消費が夏は3000円代が多いですが、エア

コンを使っている近所の方に聞くと1万円を超える月もあるということで、そうすると、うちは数千円浮いたことになります。

では、今度は言語のほうですけれども、英語のような特定地域に基盤をもつ覇権言語が媒介言語として使われることの問題を軽減するために提案された言語として、同じく私の経験にもとづいて、エスペラントの例をあげたいと思います。エスペラントというと、よく役に立たないと言われますけれども、何の役に立たないかと言うと、金儲けに役に立たないんですね、端的に言って。つまり、金儲けをしようと思ってエスペラントをやっても全然役に立ちません、でも、エスペラントにもっともよくできるということもあるんです。

「エスペラントでは、他のどんな言語でもできないことができます。数十の国で自由に話すことができる様々な生活背景を持つ現地の人々を大して苦勞せずに見つけたいと思う人にはエスペラントが一番お勧めです」

これはあるエスペラント雑誌でみつけた文言ですが、たしかにそうだと思います。つまり、どこかの国と限らずにいろんな地域で本当に話をできる人を求めるという場合に、エスペラントは非常に役に立つということです。なぜかと言うと、エスペラントは、要するにコミュニケーションを取りたい人が学ぶわけですから、異なる言語や文化の人と深く話したいという欲求で学ぶわけですから、これも、自分の欲望を満足させるということをやるとは思いますが、さきほどの節電の例と同じく、欲望の方向を少し違った形で満たすということだと思います。人間関係を築くことで私たちが満たされるのであれば、国際的な人間関係を持ちたいという、このグローバル化された現代の私たちの欲望を満たす1つの手段としてエスペラントというものがあると思います。

私自身、もともとヨーロッパに縁がありましたが、エスペラントを学び始めて、韓国やインド、中国といったアジアの人たちと色々な友だちができました。私自身のコミュニケーションの欲求をエスペラントは満たして、少しは人間にしてくれたかなあ、と言うか、新しい関係性をつくってくれました。

またさきほど、節電でお金が浮くといいましたが、エスペラントもお金の節約には有効です。つまり、海外に旅行することがあれば、エスペラントのネットワークを使って現地人の家で泊まることができます。例えば、この10月に、職場の関係でルクセンブルクに行きました。ルクセンブルクに一緒に行った同僚たちはホテルに泊まったんですけど、私はルクセンブルクに住んでるエスペラントをやっている人に連絡をして、「今度行くけど空いてる？」とメールを書いたら、「空いてるよ」というので、その家のソファに寝させてもらいました。ただお金が安かっただけじゃなくて、現地の人と色々なコミュニケーションができたという意味で、僕のほうは高級ホテルに泊まった人より贅沢な経験をしたんじゃないかと思っています。そういうことで、純粋に経済的に考えただけでもエスペラントはじゅうぶん元が取れます。

海外旅行ということをしなくても自分の家に人を招くとか、スカイプでやり取りするとかいろんな可能性がありますし、エスペラントを通じた情報は、いろんな地域からの

情報が回ってきますので、そういう意味でも世界の違った視野を得ることができると思います。エスペラントも分散的言語学習の一端を担うべき言語です。

「現代文明への問い」という大きな問いから、私たち一人ひとりにできる具体的なことに話が至りました。3.11も9.11も、小さな視野を持って大きなことをしてしまったことによって生まれた問題といえるでしょう。それに対して、私たちは、日常の小さなことも大きな視野をもってしていこうではありませんか。それが、今日とりあげた問題に対処するためにだれにでもできることだと思います。

以上で私の話を終わります。

引用文献

梅棹忠夫『日本語の将来』NHKブックス 2004

坂本龍一「7世代後のことまで考えて決めよう」『脱原発社会を創る 30人の提言』コモンズ 2011、29-39 ページ。

津田幸男編著『言語・情報・文化の英語支配—地球市民社会のコミュニケーションのあり方を模索する』明石書店 2005

オギュスタン・ベルク+中村桂子+服部英二「現代文明の危機 3.11以後 — 「力の文明」から「いのちの文明」へ — 」『環』47、4-37 ページ。

森住衛「英語教育の反国際性」『あえて英語偏重を問う』日本エスペラント学会 2004、25-31 ページ。

山折哲雄×赤坂憲雄『反欲望の時代へ 大震災の惨禍を越えて』東海教育研究所 2011

~~~~~

## 追記

この講演の内容は、講演者個人の見解であり、町田エスペラント会を代表するものではありません。

このテーマに関心のある方は次の論考をお読みいただければ幸いです。

木村護郎クリストフ「英語と原発 — 日本における普及過程、問題構造および対策の共通性—」『社会言語学』第12号、「社会言語学」刊行会、2012年11月、49-66ページ。

<http://www.geocities.jp/syakaigengogaku/syakaigengogaku2012.html>